

## サンカヨウ

霧雨に濡れ、今にも溶け消えそうな半透明の白花、この花を初めて見たのは残雪の梅池（白馬）だった。

この不思議に魅せられ夢中でシャッターを切ったものだ。もう二十年数年前のことだ。それ以来、私はなぜか梅池でしかこの花に会えないと思っていた。なぜそう思ったのだろうか。

地元岡山の県境近くの、擬宝珠山で見つけたときはわが目を疑った。けれど、郭公が鳴く初夏の日差し受けた花は、梅池のそれとは違い、どこにでもありそうな白花だった。納得できない私はリュックから飲料水を取り出してその水滴を花弁に垂らし、透明に変化するのを待ったがムダだった。

半透明に変化するには、日差し加減や雨や霧など、何らかの環境的条件が必要なのだろう。

擬宝珠山でその花を発見した翌週、映画「かそけしサンカヨウ」を見たのは不思議な偶然だった。題名の「かそけし」は、古語の「幽けし」が活用した言葉だそう、読んで字のごとく「消えてしまいそうなほど淡い様子」を表すのだとか。映画の詳細は省くが、思春期の、かそけし恋（初恋）を描いた映画だ。だが二人とも家族の愛に見守られ危機を乗り越えていくので、何ともスツキリとした気持ちの良い映画になっている。

「朝には紅顔ありて、夕（ゆうべ）には白骨となる身なり」

（蓮如上人白骨の御文章）

ふと気づけば、初恋の時代からは遙か遠くまで歩いてきた私である。その私にとって「かそけし」は「いのち」そのものの、人の存在そのもののような気もする。この御文章の言葉は、真宗門徒の家で育った私にとって、幼い頃の思い出と共にわが身に染み込む言葉なのだ。

初めて梅池のサンカヨウを見たとき、私は、この御文章の、命のはかなさと、その命への、何とも表現し難い悲しき・愛おしきを見ていたのかもしれない。

私は小学校入学の前年にため池で溺れたことがあった。池で泳いでいた中学生に助けられたのだが、奇しくもこの恩人は三年後の高校生のときのバイク事故で亡くなった。

私は水中をまがきながら、二度沈みそして浮き上がったが、三度目に沈みかけたとき、背後から股の間に手を差し込むように抱かれて救助された。その肌の感触と、青い水中を登っていく無数の白い泡を、今でも鮮やかに思い出すことができる。

以来、この記憶は私の心の中では、いつも蓮如上人の御文章のあの一節に直結している。朝には桃や李（スモモ）のような血色の良い顔（紅顔）だった、しかし夕べには白骨となる。この命の「かそけさ」の感触は、日常に埋没し雑念に囚われるときも、あたかも池の泥のように私の心底にあった。

この歳になるまで私は多くの親しい人々と死別した。死を覚悟した元同僚を見舞っての別れ際に、「これが最後だろうがさよならは言わないよ」と彼が言い。「そのうち私も行くからまた会おう」の言葉を交わし合ったこともある。このような自他の「かそけし命」を観ながら、私は何を心得何を学んだのだろうか。考えてみると何も無いような気がするが、何か言葉を越えた大切なものを学んだような気もする。

学業もスポーツも何ら取り柄のない私だったが、思春期には無限の可能性があり何でもできそうな感覚もあった。しかしいつの間にか、それが薄れ、代わって思い通りにならぬイラ立ちや哀しさの感覚が増えたように思える。そのイヤな感覚は限界だらけの自分の人生への恨み節のようだ。

そして今後は、老いることに思い通りにならないことが増えてくるのは確実だ。その時、私はますます深い老人性鬱（うつ）に陥るしかないのだろうか。

このまま老いると必ずそうなりそうだが、別の道に行く選択肢があることに私はすでに気づいている。

私がサンカヨウのように「かそけし存在」になっていく分だけ、他者の弱さと共生できるはずである。そのためには、まず自分の欠点、汚さ・ズルさ、弱さを熟知の上で、受け容れて行くしかない。間違っても自分を棚上げして他人を見下さないことだ。他人を見下す目を持つ限り、その目は自分にも向けられるだろう。人間である以上、命や能力に限りがあって、他人にできて自分にできないものがあるのは当然。まして高齢者になれば……。だから憎まれ口を言うより自他の弱さと共存すべきなのだ。その方がきっと良い日々になるに違いない。

実母とよりも長い年数を同居した義母が、ある時、「これから可愛いおばあちゃんになる」と宣言し、死の日までそれを貫いたことを思い出す。それは立派な老いであった。

森口章

